

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第169号

イザヤ 65:1

平成21年10月30日

まことに、銀には鉱山があり、金には精錬する所がある。鉄は土から取られ、銅は石を溶かして取る。人はやみを目当てとし、その隅々にまで行って、暗やみと暗黒の石を捜し出す。彼は、人里離れた所に、縦抗を掘り込み、行きかう人に忘れられ、人から離れてそこにぶら下がり、揺れ動く。地そのものは、そこから食物を出す。その下は火のように湧き返っている。その石はサファイヤの出るもと、そのちりには金がある。その通り道は猛禽も知らず、はやぶさの目もこれをねらったことがない。誇り高い獣もこれを踏まず、たける獅子もここを通ったことがない。彼は堅い岩に手を加え、山々をその基からくつがえす。彼は岩に坑道を切り開き、その目はすべての宝を見る。彼は川をせきとめ、したたることもないようにし、隠されている物を明るみに持ち出す。

しかし、知恵はどこから見つけ出されるのか。悟りのある所はどこか。人はその評価ができない。それは生ける者の地では見つけられない。深い淵は言う。「私の中にそれはない。」海は言う。「私のところにはない。」それは、純金をもってしても得られない。銀を量ってもその代価とすることができない。オフィルの金でも、その値踏みをすることができず、高価なしめめのうや、サファイヤでもできない。金も^{はり}ガラスもこれと並ぶことができず、純金の器とも、これは取り替えられない。さんごも水晶も言うに足りない。知恵を獲得するのは真珠にまさる。クシュのトパーズもこれと並ぶことができず、純金でもその値踏みをすることはできない。

では、知恵はどこから来るのか。悟りのある所はどこか。それはすべての生き物の目に隠され、空の鳥にもわからない。滅びの淵も、死も言う。「私たちはそのうわさをこの耳で聞いたことがある。」しかし、神はその道をわきまえておられ、神はその所を知っておられる。神は地の隅々まで見渡し、天の下をことごとく見られるからだ。神は風を重くし、水をはかりで量られる。神は、雨のためにその降り方を決め、稲光のために道を決められた。そのとき、神は知恵を見て、これを見積もり、これを定めて、調べ上げられた。こうして、神は人に仰せられた。「見よ。主を恐れること、これが知恵である。悪から離れることは悟りである。」 ヨブ記 28章

ヨブ記 28章は知恵の詩で構成されている深い洞察を含んだ非常に興味深い聖書箇所です。神は地の奥深くに宝石が隠されていることはじめ、多くのことを人間に顕されましたが、ご自分の知恵は顕されなかったということがこの詩のテーマで、著者は神の知恵という宝探しに乗り出していきます。この章は、学者たちの間で、後から付け加えられたのではないかと議論されてきましたが、その理由には、まず、27章との関連が考えにくいという点が挙げられます。次に、この章の表現の穏やかさがヨブが他の章で取っている姿勢や筆致と明らかな対象をなしているという点が挙げられます。理由の分からない苦しみ、痛みにさいなまされているヨブの状態は、鎖につながれた鷺が小さな鳥かごの中で、自由の門戸を開こうと手当たり次第に柵やかんぬきや止まり木に身体をぶつけて抵抗している様子にたとえることができるかもしれません。とても穏やかな気持ちで、自らの直面している状況を描写するゆとりのないヨブが必死な思いで求めているのは、自分の直面している問題の深い謎を解く鍵です。鍵を見つけたら、すぐにでも引き抜いて舞い上がり、自由になりたいということでしょう。鷺のように、一瞬のチャンスも逃すまいと攻撃的に待ち構えている状態です。しかし、攻撃的な姿勢を始終取り続けてきたヨブの口調とは全く違った 28章が、ヨブのメッセージではないと言いきれない点もあるのです。苦しみの最中にある者がいつも分別のあること、一貫したことを言うわけではなく、神がときには友になったり、敵になったりと振り子のように考えが揺れ動くことは十分考えられるのです。いずれにせよ、28章が「真の知恵」に対する洞察を与える興味深い章であることに異論はなく、考察の価値は十分あると言えます。

28章の位置づけを、「苦しみは罪の結果」との一点張りでヨブに悔い改めを迫る友との熱烈な議論に一息つかせ、語られてきたことを静かに振り返り、さらに謎解明へと進むための中間地点と捉えると、前章から後章への流れが理解しやすくなるようです。罪と苦しみとの関係を因果応報としかとらえないこの世の限られた知恵の空しさに直面した真理を求める者が、どこかに謎解明の糸口はないものかと思案したとき、神の知恵にこそ解決が見出せることに目が開かれ、また新たな思いで真理追求の旅に進んでいく、その沈思の場を提供しているのが、この 28章なのです。ヨブ記の著者（ヨブ自身、あるいは無名の著者）は、議論から離れて一息つく場を、人の目から隠された地中深くで、生命をかけて宝石や金属を採掘する鉱夫たちの努力、忍耐、熱意に視線を移し、この世の宝を獲得するために生命をかける人間の姿を描写することによって、見事に提供しています。

25章まででヨブの三人の友たちは、伝統的な知恵、神学論、自らの体験を駆使して、ヨブの大変な苦しみ、

肉体の痛みと心の傷の原因究明に取り組んできましたが、何をもってしても、現実には苦しみに日夜さいなまされているヨブには、何の助けにもならなかったのです。友たちが挑戦した「義人の苦しみ」という謎を打開する試みは失敗に終わり、友たちは、最後まで自分の潔白を主張するヨブに、ついに愛想を尽かし、自分たちの狭小な推論に基づいた結論「ヨブは罪を認めず、悔い改めないで、裁かれ、苦しみが続いている」を突き付け、沈黙します。神の知識に富んでいたはずの三人の友のカウンセリングは、ヨブをなだめるところか、ヨブの心に大きな傷を与え、「なぜ神は自分を打たれるのか、なぜ神は自分の訴えに耳を傾けてくださらないのか」という疑問に何の解決も与えられないまま、ヨブの独白が 26 章から始まったのです。人間の知恵では解決できないヨブの訴えをどうすればよいのか。ここで導入されたのが、「**知恵はどこから見つけ出されるのか**」を探求する、冒頭に引用した「知恵の詩」でした。

この詩は、1. 深奥の鉱床で見つけられる宝石と金属 2. どんな高価な宝石と金属でも買うことのできない、鉱床でも見つけられない知恵 3. 神ご自身と神を畏れる者だけが見つかることのできる知恵 の三段落に分けられますが、なぜ鉱床での働きに焦点が当てられたのかは、この詩がヨブの思索の行き詰まり、苦しみの絶頂で与えられたことと無縁ではないようです。第一段落の暗い鉱床での生命をかけての働きから得られる貴重な宝石や金属には、ヨブの現在の真っ暗闇の人生ですら、宝を生み出す過程であることが暗示されているからです。地の奥深くにたいまつやランプを手に、揺れるかごに乗って降りてゆき、足を地に着けない不安定な状態で、採掘作業に当たる古代の鉱床での採鉱法の興味深い描写を通して、宝探しにかけける人間の情熱が生き生きと伝わってきます。地の上の穀物畑の穏やかな田園風景とは違って、地の下は、鉱夫たちの生命がけの労働、恐怖、困難との闘いで火のように湧き返っているのです。獲物のありかには非常に目ざとい猛禽の目にすら留まらない、また、誇り高い獣でさえ近寄ることのできない地の奥深くでの作業が、宝を生み出すということは何を語っているのでしょうか。聖書では「**猛禽**」や「**誇り高い獣**」はサタンの特徴であることから、神が宝をそのような困難な場所に隠されたということ自体が、神が人間にだけ備えておられるものが敵に奪われないための「神の知恵」であるということになるのです。

第二段落では、宝石、金属に代表されるこの世の宝は人間の努力と熱意によって獲得することができるが、この世の宝に象徴されている真の宝、「神の知恵」は、「**生ける者の地では見つけられない**」という現実と直面することになります。地の奥底の鉱床も遠大な海も「神の知恵」を包含することはできず、高価な宝石や金や銀と引き換えに手に入れることもできないのです。最高に純度の高い「オフィルの金」「純金」でも、「神の知恵」を買うことはできないのです。ここに登場する「しまめのう」「サファイヤ」「水晶（玻璃）」「トパーズ（黄玉）」はすべて現存の天地が崩壊した後天から下ってくる「聖なる都」新エルサレムの城壁の土台石を飾る宝石として挙げられているもので、古代イスラエルの大祭司が身に付けたエポデの「裁きの胸当て」にはめ込まれた石にも一致します。地上に具現するキリストの千年支配の神の国の後、全人類の裁きが執行され、「いのちの書」に名が記されている者はすべて、永遠の父の御国に入るわけですが、そこで用いられる金属、宝石は永遠の価値のあるものはずです。興味深いことに、新エルサレムの城壁の土台石を飾る十二の宝石の中には、この世で最も硬度が高く貴重とされている宝石の王様ダイヤモンドはじめ、ルビー、ガーネット類は入っていないのです。この地上では私たちはさまざまな屈折光、反射光の下で物を見ていますが、交差した偏光レンズを用いて純粋な直進光の下で見ると、驚くべきことが起こります。ダイヤモンドなど光学的等方性の宝石はすべての色を失い真黒になり、光学的異方性の宝石は虹色に輝くのです。天地万物を造られた神は、新エルサレムの城壁を虹色に輝く光学的異方性の宝石で飾られ、都全体を透き通る純金で飾られることを預言されたのです。これら宝石の隠された性質を人間が知ることになったのはつい数十年前のことで、聖書がすでに宝石の選び分けもしていたという驚くべき事実は、「神の知恵」に帰する以外ないのです。この世の価値観をあざ笑う真の価値観は、神の知恵を通して初めて知ることができるもので、今私たちはヨブとともに、この知恵探究の最終段落に進むこととなります。

神の知恵は、ちまたで見つけられないばかりでなく、この世の生き物も暗やみの力もその在りかを知っている者はだれもないのです。噂に聞いて知ってはいても見つけ、手に入れることができない限界が、被造物にはあるのです。サタン、神の御使いでさえ、知恵を所有することはできないのです。しかし、隠された知恵の数々をすべて支配しておられ、天地万物を自由に制御することのできる神は、求める者には顕してくださることが第三段落で明らかになります。「**主は、その働きを始める前から、そのみわざの始めから、わたしを得ておられた……神が天を堅く立て、深淵の面に円を描かれたとき、わたしはそこにいた……私は神のかたわらでこれを組み立てる者であった。私は毎日喜び、いつも御前で楽しみ、神の地、この世界で楽しみ、人の子らを喜んだ**」(箴言 8 : 22-31) と、擬人化された知恵は語ります。創造の始めから神とともにおられた知恵は、神の創造の実、特に神に似せて創られた人を喜び、「**主を恐れ……悪から離れる**」者の手の届くところにいつもおられるのです。知恵に出会う唯一の方法は、主を恐れること、すなわち、唯一真の神を信じ従うことであることに、私たちは導かれます。明らかかなように、神の知恵、キリストを通して私たちは真の知恵を所有することになるのです。